

まえがき

私が The Beatles の音楽を初めて耳にしたのは、日本におけるレコードデビューの直後。1964年3月、中学二年が終わった春休みのことだった。ラジオから流れてきた I Want To Hold Your Hand にしびれて、翌日レコード店へ飛んで行った。すぐにまた聴きたかったからだ。初めて手にしたドーナツ盤。その後、ビートルズのものに加えて、他の英国のビートグループの旧作および新作レコードも続々と発売されたが、私は彼らの音楽とファッションのみならず、彼らの言葉である英語に大きな興味を抱くようになった。好きになると勉強ははかどるもので、高校でも大学でも英語の成績は常に最上位。レコードの歌詞に親しみ、その多くを暗記していたことも役立ったと思う。社会人になってからは、英語を主たる道具とする輸出業務、国際業務、翻訳業務などに従事。そして私のビートルマニアは、バンドの解散にもめげず、レノンとハリソンの死も乗り越えて、今でも続いている。

2007年の夏、私は“ビートルズ英語読解ガイド”という本を世に出した。その意図は、ビートルズ作品の歌詞について蔓延している誤解、誤訳、そして不正確な聴き取りを正すことにあった。取り上げた作品は、彼らがレコーディングアーティストとして活躍した最初の五年間に発表したオリジナルナンバー107曲（2012年発行の増補版では12曲を追加）。初歩からの英文法解説を織り込んだ。よって、CDを聴きながら、もしくは付属の歌詞リーフレットなどを見ながら、私の説明にじっくり耳を傾けた読者は、歌詞の隅々のみならず、英語というものの理解を深めたはずである。

2008年には、その続編となる“ビートルズ作品読解ガイド”を著した。分析したのは、バンド活動の最後の三年間に発表されたオリジナルナンバー79曲、およびバンド解散後に制作された2曲、計81曲の歌詞。先入観を排し、想像をできる限り抑えて、原文を文脈と当時の状況から解釈した。2013年に発行した増補版では、バンド活動の最後の三年間に録音されながらも後年まで音盤化されなかった14曲を含めて、計95曲をとり上げている。

本POD版は、基本的な内容は増補版と変わらない。しかし、随所で解説を追加している。そのために、正味3ページ、文字数にして3.9パーセントの、増大になっている。

本書が読者の役に立てば幸いである。意見などがあれば、聞かせて欲しい。異論や私の知らない情報は、特に歓迎する。

2018年2月

秋山直樹

本書の特色と利用法

本書で扱うのは、The Beatles がレコーディングアーティストとして活躍した八年間のうちの最後の三年間に発表したオリジナルナンバー81曲の歌詞。加えて、同時期に録音されながら後年まで正式には発表されなかったオリジナルナンバー14曲の歌詞も考察する。合わせて95曲である。

ビートルズ後期の作品には、前期にも増して、難解な部分や言葉自体が聞き取り難い部分がある。本書においても、そのような部分をはっきり指摘し、不明確な理由を説明している。黙って通り過ぎたり意識を装った適当な対訳で逃げたりすれば、表面上は第一人者による立派な著作に見える。しかし、読者を欺くとは言わないまでも、これでは読者のためにならない。私は敢えて不可能を認め、疑問点を提起する立場を取る。

歌詞の全文を、メロディーやリズムにとらわれずに、普通に文章を書く体裁で本書に掲載できればよいのだが、著作権を尊重する観点から、見送っている。歌詞のもっと広い部分なり全体像を眺めるには、CD付属の歌詞リーフレットや、市販されている詩集や楽譜などを参照して欲しい。本書はそのような出版物の代りになろうとするものではない。

文法用語がたくさん出てくる。知能が十分に発達した後に外国語を習得するには、体系的で能率の良い学習が助けになると考えるからだ。しかし、基本英文法は、前作“ビートルズ英語読解ガイド”で一通りの解説をしてあるので、本書では原則として繰り返さない。ただし、初登場の構文や言い回しには説明を施してある。より深く英文法を学びたいビートルズファンへは、姉妹書“ビートルズ英語文法ガイド”の利用を勧める。

個々の単語の主な語義や用法などについては、“ビートルズ作品英和辞典”を参照して欲しい。

本書の記述の仕方について説明しておく。歌詞の中の語句に直接的に言及する際は、イタリック体（例えば *There's nothing you can do that can't be done.*）にしてある。〈help oneself to something〉のように、〈〉でくくってあるものは、言い回しなどの基本的な構成を示している。〔〕内の数字は、本書における作品番号。“ビートルズ英語読解ガイド”との重複を避けるために、108からスタートしている。「」で挟んであるのは、私の訳語。一方、他書からの引用の前後には、『』を用いた。また、著作物の題名は、英語のものは大文字だけで記し、日本語のものは“ ”でくくってある。